

こゝろやの老

薰發の卷

或生に示す……………	一
寂光土と極樂……………	五
西方極樂の説……………	八
光 明……………	三〇
無 量 光……………	三三

或生に示す

吾淨土の勸めとて 強ちに唯極樂にゆきて後 七寶の宮殿を栖家として 百味の飲食を食る爲に往生を欣ぶといふ主義にてはなし。それらのことは枝末の事にて 兎まれ角まれ 先づ阿彌陀至尊に歸し 極樂を求めよといふ旨趣は他に非ず 阿彌陀尊即ち自己本來の家父に遇ふので 極樂とは即ち自己の本家にてぞある。元來人の精神は何もぞ 何處より出來りしや 自らよく究めて了解し 全體自己は何ももので有るか御存じ有るか。自己は是十四元素の化合物にして 念の入たる土人形同様なものでせうか 將た雜多の元素より成立つた有機物でせうか。それは見ようによつて それ丈の物にも見れば見ゆるのです。いまま少し進んで人間を見れば 人には營養生殖器ありて其肉を養ひ 世嗣を製造し 犬や馬よりも體軀や神經の構造も巧であつて 隨て生活の度も高いのであり それも唯肉を養ひ 世嗣を造るだけにて人事己るとすれば

五十歩百歩少し進化した動物にて 犬馬の兄とか姉といふまでのことだらう。それ丈に見ればそれ丈にも見ゆる またそれ丈の人間も澤山あるのである。また少し進んで人間は歴史的動物ともいへばいへるのであり また地層を増殖する物器械ともいへばいはるゝ。または地球を莊嚴する處の活人形ともいはれないこともない。唯肉體についでのみ人類の資格を定めたならばまことに價値のないものである。

また宗教的人類として人間を見るときは 人間には 靈智靈能こそ他の動物よりも精神作用が遙かに進化してあれば 此人間は天國に入るまで 豫備の生活として 活動すべき動物にして 靈の方面に尤もよく發達せねばならぬ。しからざれば 生涯の作爲は地獄の薪木を積計りであるといふべし。

また人類は極樂といひ また真理の靈界とも 寂光土とも云ふべき 無限の真理を覺り得る全智全能の極を得らるべき 最終真理の聖域に入る全知を興へらるゝ大學に進入すべき 豫備科とも云はるゝ。そこで先にいひし極樂は 自己本來の家父にあはん爲とはいかなるわけならば 元來人生は何れより生れ來しや 天より降りしや地より湧きしや 全く母の胎にて初めて靈魂も成り立しと思ふや。何にしても自己あることは疑はないので 自己全體何者なるか また自己の出處を知らず 自己の家父をしらす これを迷といはずして何といひませう。阿彌陀至尊こそ本來の家父にてぞましますを 何とか方便をもつて親にあひなされ。父をたづねなされ。元來父の中にありてあまり近いのでわからぬのでは有りませぬか。實際の父にあふて はじめて自己の眞面目を見るのである。自己の心源を覺り得るのである。若しもひよつと父のかほを御見なされ。そのときのうれしさ よろこばしさ 筆に記されませうか 言葉にのべられませうか。

眞の父にあふときのうれしさ 物のたとへられませうか。自己の眞面目を見た時の容子他に示されませうか。マア自分で見るより他にみてやある。したならば 從前の自己とはどこやらかはりて しのゝめの空晴わたりしごとくに 無量のひかりのなか

なる自己であつて、三界迷妄の鷄子でありたることを自覺するでせう。自己全くその無限の光壽の分子にして、無限の光壽全く自己の父たることが意識せらるゝでせう。

また先に申ました如く、自分の靈に就ての資格を定めなされ。阿彌陀を頼といふのは何故とならば、先づ自己を化學的生理的動物とのみ見ずして、高等なる宗教的人類として、この一生は、無限の眞理を自然に悟り究むべき極樂、即ち智士の大學に入校すべき準備の精神生活にして、自己の信仰と實行の行爲とは、畢生の最後の驗定に及第と、落第とは公明正大なる、眞理の料場に顯はるのである。自己は先づその大學に入るための、精神生活たる生涯なりと、確かに決心したるが安心出來たといふのである。

吾が淨土の教として外の物でない。人々塵來つた精神を開きて自己の父にあふまでのこと。さればとて、死してのち始めてあふといふことではない。精神は生れながら持ち來りしに非ずや。精神の眼が開けば、いつでも安心する。天地一ぱい何處か、父に在さざる處あらん。若しも一たび見たならば、どうして昔は見へなかつたのであるかと、それこそはかへつて不しぎに思はるゝであらう。

寂光土と極樂

寂光土といへば高くおもひ、極樂といへば、よりは卑しきものに心得る向もある。それは天臺なども、四土を立て、寂光は高く、極樂は次のように、判釋されてある。けれども、判釋てふものは、どふにでもなる。また見ようによつては、だうにでも見ゆる。むかし地と太陽に於て、地は大きくて、太陽は地球を照す一個物の位に見てをつた。かはりて、今日では太陽中心説が勢力あるようなもので、昔のまゝの判じかたを、どこまでも固執して居るは愚の至である。そこでいま寂光と極樂とは、實際は四土の階段に見るよりは、同體の異方面と見た方が適切である。何にしてもこの天然現象界は、宗教にては未だ發展すべき性能と、脱却すべき素質とが有るものと見る。

而て之を超越し開展したる宗教意識が遊入する處は、眞理の靈界にして眞なり、善なり、美なり。この眞善美の方面に、直理の神は在ますとし、それを最終の目的として、欣求すべきのである。この天然の方面は、穢とし、染とし、有限なる個々なり。眞理の方面は、清淨土なり、無限なり、絶對なりとし、その至眞至善至美の靈界を、天國とも、寂光土とも、極樂とも、または淨土とも名づけたのである。何故に斯く同じ至理の境界を種々の名を命じたのであるとならば、それは自然に（）まれた人の方に心理的關係があるので、其最終の眞理の靈界を名づくるに若し之を感覺的に云はば、清淨國土といふて感覺的至美を表明したので、極樂とは感情的に、感情の中に最も靈福を表するものは快樂であり、彼の靈界は熙怡快樂の極りである。此快樂の極とは、感情的至美を示したので、矢張り至美、極樂の樂とは眞理の樂である。また寂光土とも、無量光土とも智士ともいふは、至眞の靈界にて、知力的に命じたもので、其靈界は、唯眞智靈智の至り智慧光を以て世界とし、交徹靈知の妙境にして、心と境と、致一であるとし、知力的に示したのである。無爲泥恒の土とは意志に名づけたのである。至善の靈界は至高善の極にして、自然無作の意作にして、一切の作意を超越した處、無作の作無爲の爲にして、本來自然の作爲靈明不可思議の妙處を無爲泥恒と名づく。また蓮華藏世界といふも、極樂の異名にて、これは譬喩を以て、至妙の靈界を示したるなり。そは天然を開發したる、即ち蓮華の開きしごとく天然意識を開發して、靈界に入て始めて意識すべき境界なるを以て蓮華藏と名づく。一切含藏の義である。無量光明土に含藏せるものは無量なり、無量光土即ち蓮華藏土なり。藏は如來藏法身藏。開發すれば、即ち無量光明土なり。

又密嚴世界とは、天然の人には、感覺世界の外は肉眼を以て見る能はず、天然の人には秘密にして思議す可からず。己に信心開發して、眞理靈界の方面に入るものの莊嚴微妙不可思議なるを以て密嚴世界といふ。その他數多の名ありと雖ども、至美の靈界を表明したる異名に他ならざるなり。

靈界の異名 清淨土感覺的 極樂感情的至美 寂光土亦智土知力的至真 無爲涅槃
界意志至善 譬喻的に蓮華藏世界 秘密的に密嚴淨土

西方極樂の説

西方十萬億土を過て極樂ありと。然る時は天然科學に衝突する 何れの處に極樂世界有ることを證すべけん。

宗教に天然的宗教と超天然とあり。佛教は天然的宗教にあらず。淨土何ぞ天然界に發見することを得ん。佛教は精神的宗教なる故に精神開發せば極樂元來去此不遠。然れども天然と發展せる精神の懸隔十萬億土も管ならず。己に開展して彌陀を見奉る時は 十方法界及虚空界一切處として極樂に非るなきを知らん。

西方とは終局の表語にして方處に非ず。東方を發心とし 西方を究竟とし 終局目的の眞理の歸處とす。是符號に他ならず。また西方と定めたるは 歸處を日没に示して 思を一方に傾けしめ 意志を一にせしむるため また日没の懸鼓の朗日輝を收めて 欣慕の感情を傾けしむるに適する故なり。

八

光明

かぎりなきおめぐみのみひかりによりて、感謝の日を暮して 天にも地にもいづれの處にもあなたのおめぐみの光の充分渡らざる處とてなきを我身の罪ふかきも よりは深きおめぐみのなかに清められて かたじけなきおmoiの中に日を送らしめたまふひとりの大なるみおやのみまへに謝したてまつる。

吾大なるひかりのみおやには さま／＼の聖き尊とき御名ありて その聖名によりて我らに聖きみむねをあたへたまふ。いはゆる清淨光歡喜光智慧光と不斷光となり。我らは罪により穢れたるころなれば 眼に視耳に聽くところとして染汚せられざるなきも あなたは清きいさぎよき聖旨より おめぐみのみひかりをあたへて われらが感性を清く潔よくこそせさせたまふ。

にごりにもそまぬはちすの花にさへ

この光榮はあらはれにけり

復次に我らは煩惱の迷ふく世の中の風にふかれて 喜怒哀樂の浪を起し 我執のふかく愛憎の雲はつねにむねのうちに横はる。そのころのまよひより 不平と不安の日のみなるに あなたかたじけなや あなたは平和と安慰をもて つねに安らげく歡ばしき聖きみむねを興へたまふ。

かぎりなきめぐみのほどをしるときは

ねてもさめてもうれしかりけり

また我等は其性の光を失ひ 不正の不正たるを自ら見ることも能はざるも あなたは神聖と正義の光を日月の如くに照して我の心の眼を開示したまふ。

ひとしらぬ己がころのそこまでも

このみひかりやてらしわくらん

我らの意志は薄弱にして やゝもすれば氣に驅られて 正道をふみ損じ 情操甚だ

10

九

11

弱く志節貫きかたし。しかるにあなたの聖旨によりて 意志を安立するときば 我らに金剛の志氣をあたへたまふ。

さむきにもかはらぬ松のみさをこそ

たえぬひかりのみどりをやみん

さへられぬあなたのみひかりの中によるこばしき日を暮し いさぎよき身をすごし時々刻々も聖きみむねの自己に現はれんことをばいのりなされ。わすれたまはごらんことを。

無量光 本體

阿彌の本質は 天然世界秩序を規定する形式即ち時間空間及び一切因果より規律の現象界を超絶したる本體。

約して云はゞ絶対精神態なり。絶対には空間時間を超絶し非時間非空間非物的にして 絶対自己の觀念的に存在せり。精神態にして 内に非ず 中間に非ず 絶対主體なり。

絶対無限の精神態より 雄大なる光明は光明態と活動力とを以て一切處に周遍し空間に非ず 外に非ず 空間の形式を造り出す活動の主體にして 一切空間態の主體なり。

無限の光明 光明とは本より非物質にして 精神態光明なり。光明には寫象とまた活動の原動力とを有す。卑近なる例を以て太陽に光線を熱線と化學線と有す如く 無

限の真心光明には 寫象態觀念態は光線の如く 活動の源動力態は熱線の如く 非物質精神態の光明にも副線の理あることは疑ふへがらず。

絶対精神態の永劫自存なるを無限壽と云ふ。無限壽とは時間の有限無限を超したる絶対なり 同時態なり 時間の形式を發生する主體なり。自ら出て活動をなす命と時間の形式を發する主體 無限壽にして 一切の活動をなすを生命とす。無限永劫の精神的自中存即ち絶対無限の壽命 永劫の中の絶対不變の實體 無限壽。光壽を離れたる處と時なきをする時は 自己の精神生活全く無限光壽の中なる生活なるをすれば何時何處にも阿彌の中なる活動なり。

一切世界の活動

無量光 絶対無量光は 一切智慧態 空間時間を超絶したる絶対無限の阿彌とすれば常に統攝せられざるものなきなり。光明とは智慧の一切智と一切慧と 譬へは一切勢力は太陽のエネルギーに歸すべきの如く 絶対無限の精神界の一大勢力は 絶対無限の光 即ち一切智と能との外に 一切の精神的勢能なきを 然れどもこの理性を自ら識らざるを迷とし 之を意識する時は 無限の精神的勢力に對して 之に歸命信順せざるを 或は邪とし顛倒と名づくるなり。

絶対智能の光中は絶対 一切精神界のエネルギー

無限光とは絶対知と能にして精神界のエネルギーの性能なり。

世界天則秩序とは一切衆生の雜種を統一攝理して括合する秩序にして この一切衆生を軌持する統一は是の統攝する所なり。

絶対統一の根底を阿彌法身とすれば一切衆生はこの理性によつて動くべき理性を付せられざるべからず。この衆生の理性を即ち佛性と名づく。絶対精神即ち法身藏性は一切衆生の一大根底にして 即ち一切の機制心理個體の實體なり。

絶対實體より世界個人衆生心を現出するは即ち阿彌の一切智と能との勢能によりて發生せられたるなり。この天然的人々は之を開展すれば高等にして 是の目的に協力

することを得べき理性付與せられて 又天然秩序のなかに個々精神活動の勢力を更
 處の絶対木體 即ち無限の知光即ち知能なり。

衆生は天然の規律の中に衆生に對しても絶対無碍の知能によつて統攝し擔保せらる
 衆生にて 天然の物質的世界の中にも天然の精神生活の中にも 不識的に絶対知の
 理性を具存するの故に 不識的に道德的行爲をなすあるは之れなり。

歸趣の理性としては 世界過程に 含畜に 歸趣の理性あるが故に 無限光明即ち
 一切慧態なり。阿彌の絶対寫象即ち無限の心的光明は無碍にして十方の法界を照し
 一切衆生の精神を開展して不斷に休息することなく 之に依て佛性開展することを得

衆生悉く佛性 即ち性能を具有するも 法界の光明 即ち衆生に含畜的の一切慧の
 觀念によらざれば自ら發展すべきに非ず。衆生の天然秩序の本能中に具するは佛性に
 て 一切智慧の勢力より發展せられて 個人の精神として開發すべき豫地の性能即ち
 佛性なり。一切衆生の佛性を統一するものは即ち絶対理性の智能なり。是各個人の佛性
 能を開展するは客體即ち歸趣の理性にして阿彌の一切慧即ち無限の光明なり。人はこ
 の光明一切慧によりて佛性開展して絶対阿彌の目的と致一するを得。

歸趣の理性とは 世界の衆生には絶対無碍の光明によりて 即ち衆生の精神界には
 無礙光の中に一切を開展して 一切衆生の了因佛性を開展して 阿彌の終局目的に協
 力せしむる理性にして 即ち一切慧精神の光明なり。無碍光とは是十方法界に遍在せ
 る慧態にして衆生の精神に含蓄せる 即ち客體に對する衆生の方面を能觀とせば 客
 體は所觀の境なり。絶対觀念の阿彌との觀念によりて 啓示融合靈化として 人の精
 神に感應し交渉すべき處の客體の性能にして 人は此に對する心機開展して阿彌の性
 能に致一するに至れば これを本願に乗じたるといひ 選擇せられたるものといふべし
 本願力といふも絶対真心の一慧の一切を解脱靈化する勢能に外ならず。本來法界に
 周遍するも人の信仰の觀念内容に致一すべきものにして 現象界に求むべきものに非
 す また絶対真心の慧能なればこゝを去て彼岸に至て始めて感應すべきものに非ず。

昭和九年三月二十五日 印刷
 昭和九年三月二十八日 發行
 編輯兼 山崎 辨成
 發行人 小石川區關口町六十五番地
 印刷人 小林 七太郎
 印刷所 小石川區關口町六十五番地
 印刷所 靜文社 印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六八五一番